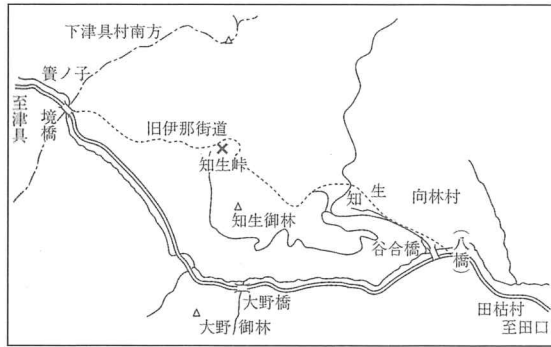


郷土館発

知生峠殺人事件と左八様

弘化四年(1847)七月四日、伊那街道知生峠で起こった事件は、平和な山村に大騒動をもたらした。綱吉、熊次郎、源治郎という三人組が、信州飯田の商人丈兵衛の所持する商取引の集金を狙った強盗殺人事件である。内二人は逃げ失せたが、綱吉は田口十箇村の人々の協力により、荒尾に追いつめられ、逮捕された。

この事件に動員された人数は田口十箇村だけでも千二百人以上、周辺の他村からも動員されているから実数はわからないが大変な数である。これらの人々



知生峠位置図 設楽町誌・村落誌「向林村」より

はすべて無償の奉仕である。

後述の正式の検視役人を宿泊させるため、農家を宿にしたが、玄間も風呂場もないので急ごしらえで造ったり、食べ物や稲橋などから取り寄せたりし、大変な出費でもあった。

当時向林村は、奥州磐城平藩の所領であり、その支配のための陣屋は、国府村(現在の豊川市国府)にあった。松本左八郎はその陣屋の手代の一人として、この強盗殺人事件の内見に出役した。二十八歳である。

事件から十日あまり、国府陣屋と被害者の地元飯田藩からそれぞれ八、九名の役人が出向いて現地での取調べや聞き取りを行った。この中にもおそらく松本左八郎の姿があったであろう。設楽町誌の町村誌「向林村」に「隠れた文化財」として、こんな記事がある。

向嶋墓地の奥に縦一メートル、横五〇センチメートル、厚さ二〇センチメートルくらいの自然石の墓標がある。松本左八郎の墓で、通称「左八様」と呼んでいる。その人は学があり、剣にも秀で尊敬された人物であった。元国府陣屋の武士で明治を迎えて南設・北設を徘徊していたが、最後の地を八橋に選び、子弟の教育



左八様 昨年12月

に当たった。八橋でも教えを受けた者が多く、教え子たちが墓標を建立した。

墓標(表) 文学慈教信士

墓標(裏) 元磐城城主安藤

対馬守家来松本左八郎 当国国府陣屋史生後遊歴 而当村道傍及作手辺徘徊 而筆子数百名教育

明治二十二年三月亡

行年 七十才

明治の世となり、五十歳近くで職を辞さざるを得なくなった左八郎は、流浪の後、最期の地として若い頃に訪れた八橋を選び、ここで自らの学問を生かし、子供たちの教育に当たったようである。

血なまぐさい事件の取調べの中で、村人たちの団結する力を目の当たりにし、役人たちに対するおもてなしの心に触れたことが、左八郎をこの里に呼び寄せたのかもしれない。

(奥三河郷土館

館長 平松 博久)